

患者満足度の高い パーシャルデンチャーの臨床 —歯科医師と歯科技工士の連携を考える—

平成23年の歯科疾患実態調査によると、8020達成者は38.3%で、平成17年の24.1%から大きく増加していますが、70歳以上の高齢者の4割以上はパーシャルデンチャー装着者です。インプラントによる修復処置の信頼性はかなり高まっているとはいえ、パーシャルデンチャーによる欠損修復は今後も増加する傾向にあるといえます。

一方で、歯科技工士の数は年々少なくなっており、30歳未満の就業歯科技工士の数は20年前の半分以下になっています。特に歯科技工士の高齢化とともに有床義歯を扱う歯科技工士の数は今後極端に少なくなっていくことが考えられ、若手の育成、歯科医師との連携が益々重要になると思われます。

パーシャルデンチャーは、幅広い欠損に対応できる融通性のある治療ではありますが、正しい設計に基づいて前処置がなされていないと、義歯の装着に時間がかかるばかりでなく、「がたつく」、「噛めない」、「痛い」、「見た目が悪い」など、その後の対応に苦慮することも少なくありません。

精度の高い義歯を製作するためには、模型だけでは分か

らない患者情報や治療の方針、設計の意図を歯科医師が的確に歯科技工士に伝えることが大切です。そのためには、歯科医師は技工操作に配慮した設計を行い、口腔内で歯冠形態修正を行う必要があります。また、歯科技工士は前処置の行われた歯に対して適合精度のよい義歯を製作することが求められます。すなわち、満足度の高い義歯製作のためには、患者と歯科医師、歯科技工士の相互理解が最も大切であると考えます。

今回は特に歯科医師と歯科技工士の連携に焦点を当てて、患者満足度の高い義歯を製作するために必要な設計の考え方と前処置、技工操作について解説したいと思います。パーシャルデンチャーの設計の基本を知れば、保険の義歯からノンメタルクラスプデンチャーまで、歯科医師、歯科技工士にとってストレスなく、患者さんに満足していただける義歯が製作できることは間違いありません。ぜひ、このコラボセミナーを聞いていただき、明日からの臨床の引き出しを増やしていただければ幸いです。